

原著

南海トラフ地震被害想定地域に居住する  
4年制大学看護学生の防災意識の認識  
細川欣寿<sup>1)</sup> 中野葉子\*<sup>2)</sup> 後藤歩<sup>3)</sup> 小原桃果<sup>4)</sup> 和太優<sup>5)</sup>  
梶野愛里菜<sup>6)</sup> 横谷知也<sup>7)</sup>

高知大学医学部附属病院看護部<sup>1)</sup> 高知大学教育研究部医療学系看護学部門<sup>2)</sup>  
大阪大学医学部附属病院看護部<sup>3)</sup> 須崎市役所<sup>4)</sup> 神戸市立医療センター西市民病院看護部<sup>5)</sup>  
大阪急性期・総合医療センター看護部<sup>6)</sup> 宝塚医療大学和歌山保健医療学部看護学科<sup>7)</sup>

Perceptions of Disaster Prevention Awareness among Nursing Students at  
University Earthquake A Who Live in Damage Estimated Area by the Nankai Trough

Kinju Hosokawa<sup>1)</sup> Yoko Nakano\*<sup>2)</sup> Ayumi Goto<sup>3)</sup> Momoka Ohara<sup>4)</sup> Yu Wada<sup>5)</sup>  
Erina Kajino<sup>6)</sup> Tomoya Yokotani<sup>7)</sup>

Kochi Medical School Hospital Nursing<sup>1)</sup>

Kochi University Research and Education Faculty Medicine Unit, Nursing Sciences Cluster<sup>2)</sup>

Osaka University Hospital Nursing<sup>3)</sup> Susaki City Hall<sup>4)</sup>

Kobe City Medical Center West Hospital Nursing<sup>5)</sup>

Osaka General Medical Center Nursing<sup>6)</sup>

Takarazuka University of Medical Sciences, Wakayama School of Health and Medical Sciences,  
Department of Nursing Care<sup>7)</sup>

要 旨

目的：南海トラフ地震被害想定地域に居住する4年制大学看護学生の防災意識の認識を明らかにする。

方法：4年制大学看護学科1年生61名と3年生62名を対象とし、防災意識尺度20項目についてGoogle formsを用いて質問紙調査を実施した。結果は、記述統計及びWelchのt検定、Kruskal-wallis検定により分析した。

結果：看護学生123人に配布し103人から回答を得た。4年制大学看護学科1年生と3年生の間には防災意識尺度において「防災尺度総平均得点」と「他者指向性」の2項目に有意差が見られ、1年生の防災意識が高かった。

考察：1年生と3年生の防災意識の差は、災害に関する継続教育の有無、新型コロナウイルスの影響による学校生活・社会生活の変化などの影響を受けている可能性が推察された。

結論：入学時から定期的な災害教育を行い、防災意識を維持・向上できる機会を設ける必要があることが示唆された。

キーワード：看護学生 防災意識 南海トラフ地震 居住年数

受付日：2024年7月25日 受理日：2024年8月29日

### Abstract

**Purpose:** To clarify the disaster prevention awareness of nursing students residing in damage estimated area of Nankai Trough Earthquake.

**Method:** A total of 61 first grade and 62 third grade nursing students from University were surveyed. The questionnaire was enrolled by using Google forms consisting 20 items related to disaster prevention awareness. The results were analyzed descriptive statistics, Welch's t-test, and Kruskal-Wallis test.

**Result:** Questionnaire were distributed to 123 nursing students, and responses were obtained from 103 students. Significant difference were observed between first grade and third grade nursing students in two items of the disaster prevention awareness scale, namely "Total Mean Score of Disaster Prevention Scale" and "Others Orientedness". Throughout this questionnaire, first graders showed higher disaster prevention awareness.

**Consideration:** The difference in disaster prevention awareness between first year and third year students may be influenced by factors such as the presence or absence of continued education on disasters and changes in school or social life due to the impact of COVID-19 pandemic.

**Conclusion:** The results suggested the need for regular disaster education from the time of enrollment to provide opportunity for maintaining and improving disaster prevention awareness.

**Key words:** Nursing student, Disaster prevention awareness, Nankai Trough Earthquake, Residence years

### 【諸 言】

内閣府の南海トラフ巨大地震対策検討<sup>1)</sup>によると、高知県は南海トラフ地震におけるケース別津波予想高・津波到達予想時間において他県と比較し、高い水準となっていることが示されている。将来災害時の医療に関わる立場となる看護学生は、まず災害時に自分を守ることができるよう防災意識を高め、防災対策を講じていくことが求められる<sup>2)</sup>。そのため、特に南海トラフ地震津波避難対策特別強化地域にある看護学生は、防災意識が高い水準で維持されることが期待される。しかし、看護学生の災害看護に対する意識や災害看護教育のニーズに関する先行研究では、学生は災害看護への興味関心は高く、その興味関心は災害直後の急性期の看護実践に置かれており、防災意識は低い<sup>3)</sup>と報告されている。

また、看護学生の防災意識について「災害に関する関心度」「災害に対するリスク認識」「居住地域の災害危険場所の認知」の観点から、講

義形式の災害看護学の履修の有無別で検定を行った研究では、有意な関連は認められなかった<sup>4)</sup>。

一方、防災意識について、南海トラフ被害想定地域に該当する看護系大学生の防災意識は全国平均値を上回っていたという報告がされている<sup>5)</sup>。また、看護学生の防災意識には居住地域の災害特性、災害経験、近年の大規模地震の発生、地域活動への参加意思や居住地域への愛着、家族や友人との災害に関する会話、避難者の疑似生活体験が関連していること、防災対策には居住地域の災害特性、近年の大規模地震の発生、避難者の疑似生活体験が関連していることが示唆されている<sup>2)</sup>。

これらの先行研究からも居住年数に伴い防災意識が変化している可能性があり、認識の違いを明らかにする必要があると考えられる。

本研究では南海トラフ地震被害想定地域に居住する4年制大学看護学科に在籍する1年生と3年生を対象に、その居住年数による防

災意識の違いについて明らかにし、今後の看護学生に対する防災に関する啓発活動の拡充について示唆を得ることとした。

## 【目 的】

4年制大学看護学生の1年生と3年生の防災意識について横断的調査を行い、防災への認識の違いを明らかにし、看護学生の防災に関する啓発活動について検討する。

## 【方 法】

### 1. 用語の定義

- (1) 災害：元吉忠寛<sup>6)</sup>によれば、ある地域社会に影響を及ぼす風水害、雪害、干ばつ、渇水、地震や火山噴火などの自然現象による災害だけではなく、テロ、革命や戦争など人為的に引き起こされる現象も災害に含まれることとされている。本研究では、自然現象が原因となって引き起こされる事象を災害として扱う。
- (2) 防災意識：尾関ら<sup>7)</sup>（2017）によれば「災害に対して日常的に、自らが被災し得る存在であることや情報的・物的・社会的備えが必要であることを認識している度合い、また、自分や周囲の人の生命や財産、地域の文化や共同体を自ら守ろうとする程度」

### 2. 調査方法

4年制大学医学部看護学科1年生61名と3年生62名（編入生は除く）を対象とし、2023年5月～2023年9月にGoogle Formを使用した無記名自記式質問紙によるWeb調査を実施した。対象の選定について、4年制大学医学部看護学科の4年生は前期の授業で災害看護学を受講するため、防災意識にバイアスがかかると考え対象から除外し、最低学年と最高学年を比較するために2年生も除外した。

質問内容は、基本属性として性別、学年、南海トラフ地震被害想定地域出身者の有無、南海トラフ地震被害想定地域での居住年数、一人暮らしの有無、災害教育を受けた経験の有無、災害ボランティアの経験の有無、ハザードマップの存在を知っているかの有無の8項目について回答を得た。今回使用した島崎ら<sup>8)</sup>が開発した防災意識尺度は5因子20項目（被災状況に対する想像力：4項目、災害に対する危機感：4項目、他者指向性：4項目、不安：4項目、災害に対する関心：4項目）で構成され、防災意識について定量的に測定できる尺度である。アンケートの初めに同意チェックボックスを置き、参加者がチェックをすることで同意を得たこととした。

防災意識尺度20項目の質問について、「1. 全く当てはまらない」から「6. かなり良くあてはまる」の6件法で回答した。

### 3. 分析方法

アンケートによる回答から基本属性、防災意識尺度の平均値、標準偏差、95%信頼区間を算出し記述統計を行った。防災意識尺度20項目の総得点から偏差値を算出して防災意識高群・低群の2群に分け、また、居住年数5年未満5年以上群の2群によるクロス表を作成し、クラメールの連関係数を算出した。居住年数を5年間で2群に分けた理由は、対象者の居住年数が5年以内の者と10年以上の者の集団に分かれていたためである。1年生と3年生の防災意識尺度総得点と各因子の平均値を用いて2群間のWelchのt検定を行った。また、1年生と3年生の2群の内、居住年数5年未満5年以上群に分け、防災意識尺度総得点と各因子の中央値を用いてKruskal-wallis検定を行った。有意差が認められた項目に関しては、Steel-Dwass法を用いて事後検定を行った。記述統計及び統計解析にはEZR<sup>9)</sup>を使用した。

#### 4. 倫理的配慮

対象者が所属する大学での倫理委員会に承認（2023-13号）を受け実施した。

研究参加依頼の際の配慮：

当該施設の責任者に対して本研究の目的・意義・方法・倫理的配慮について研究実施協力依頼文書を用いて口頭説明を行い、研究に対する同意を得た。研究参加者に対して本研究の目的・意義・方法、研究への協力による利益相反がないこと、研究参加は任意であることと撤回の自由、参加者への費用負担や謝礼はないこと、参加・不参加に関わらず学業や単位取得に影響はないこと、個人情報の保護、研究成果の公表について説明文書を用いた口頭説明を行い、Webアンケートに同意を得るチェックボックスを設け、そこにチェックを入れたことで同意を得たとした。

### 【結 果】

#### 1. 基本属性

4年制大学看護学科に在籍する1年生と3年生の計123名にアンケートの調査の依頼を行い、1年生は57名、3年生は46名の回答が得られた。回収率は、1年生が約93.4%、3年生が74.2%、有効回答率は100%であった。内訳として、女性が95名、男性8名であった。（表1）

1年生の南海トラフ地震被害想定地域外出身者が39名、南海トラフ地震被害想定地域内出身者が18名、3年生の南海トラフ地震被害想定地域外出身者が37名、南海トラフ地震被害想定地域内出身者が9名であった。

#### 2. 記述統計

防災意識尺度のアンケート回答結果から、1年生と3年生の間1～問20の質問項目を、因子1「被災状況に対する想像力」（問1,3,

**表1 回答者の基本属性** N = 103

属性	1年生	3年生
性別	女性 (53.4%)	40 (38.9%)
	男性 (1.9%)	6 (5.8%)
南海トラフ地震被害想定地域内出身者	南海トラフ地震被害想定地域内 (17.5%)	9 (8.7%)
	南海トラフ地震被害想定地域外 (37.9%)	37 (35.9%)
1人暮らしの有無	はい (48.5%)	34 (33.0%)
	いいえ (6.8%)	12 (11.7%)
災害教育を受けた経験	あり (3.9%)	6 (5.8%)
	なし (51.5%)	40 (38.8%)
ボランティア経験	あり (3.9%)	6 (5.8%)
	なし (51.5%)	40 (38.8%)
ハザードマップの認識	あり (42.7%)	36 (35.0%)
	なし (12.6%)	10 (9.7%)
南海トラフ地震被害想定地域内居住年数	5年未満 (37.9%)	37 (35.9%)
	5年以上 (17.5%)	9 (8.7%)

5,19)、因子2「災害に対する危機感」（問6,12,13,17)、因子3「他者指向性」（問4,16,18,20)、因子4「不安」（問7,8,10,14)、因子5「災害に対する関心」（問2,9,11,15)に分類し、平均値、標準偏差、95%信頼区間を算出した（表2）。なお、問2,9,11,15に関しては逆転項目であるため、島崎ら<sup>9)</sup>の提示している防災意識得点算出方法に従い、正規の順序に並び替えた。

続いて、防災意識尺度得点について偏差値を算出し、偏差値50以上の点数の群を「防災意識高群」、偏差値50未満の群を「防災意識低

表2 学年別の各質問項目の平均値、標準偏差、95%信頼区間 N = 103

質問項目	1年生 (N=57)		3年生 (N=46)	
	平均値±SD	95%信頼区間	平均値±SD	95%信頼区間
<b>因子1：被災状況に対する想像力</b>				
問1：災害発生時に人々がどのような行動を取るか具体的なイメージがある	3.89±0.84	3.67-4.12	3.65±1.04	3.34-3.96
問3：災害発生時に必要となる物資の具体的なイメージがある	4.04±0.87	3.81-4.26	3.74±1.06	3.42-4.05
問5：災害発生時に町がどうなるかの具体的なイメージがある	3.47±1.24	3.14-3.80	3.30±1.26	2.93-3.68
問19：災害発生時に自分がどのような対応をすればよいか具体的なイメージがある	3.42±0.89	3.19-3.66	3.37±1.02	3.07-3.67
<b>因子2：災害に対する危機感</b>				
問6：ひとたび災害が起きれば大変なことになると思う	5.42±0.92	5.18-5.67	5.30±0.84	5.05-5.55
問12：災害は明日来てもおかしくない	5.05±1.20	4.73-5.37	5.02±0.93	4.75-5.30
問13：個人の努力だけで災害の被害を減らすことは難しいと思う	3.91±1.42	3.54-4.29	4.17±1.02	3.87-4.48
問17：防災は自分の地域だけで完結するのではなく他の地域との連携も必要だと思う	5.11±0.92	4.86-5.35	4.67±1.14	4.34-5.01
<b>因子3：他者指向性</b>				
問4：色々な友達をたくさん作りたい	4.77±1.02	4.50-5.04	4.09±1.30	3.70-4.47
問16：人とコミュニケーションを取るのが好きだ	4.63±1.03	4.36-4.90	3.89±1.12	3.56-4.22
問18：人が集まる場所が好きだ	3.54±1.18	3.23-3.86	3.11±1.14	2.77-3.45
問20：他の人のために何かしたいと思う	4.58±0.91	4.34-4.82	4.39±0.86	4.14-4.65
<b>因子4：不安</b>				
問7：自分は心配性だと思う	4.58±1.10	4.29-4.87	4.02±1.04	3.71-4.33
問8：不安を感じることが多い	4.42±1.03	4.15-4.70	4.26±1.04	3.95-4.57
問10：災害のことを考え始めると、様々なパターンの被害を妄想してしまう	3.74±1.23	3.41-4.06	3.39±1.29	3.01-3.77
問14：身の周りの危険をいつも気にしている	3.63±0.96	3.38-3.89	3.35±1.20	2.99-3.70
<b>因子5：災害に対する関心</b>				
問2：自分の利益にならないことはやりたくない [逆転項目]	4.12±1.24	3.79-4.45	3.70±1.26	3.32-4.07
問9：自分の身近なところで起きそうなことだけ考える [逆転項目]	3.44±0.96	3.18-3.69	3.13±0.98	2.84-3.42
問11：普段は災害のことは考えない [逆転項目]	3.81±1.36	3.45-4.17	3.52±1.26	3.15-3.90
問15：災害対策は耐震補強や防波堤の整備など物理的なものだけで十分だと思う [逆転項目]	4.95±0.91	4.70-5.19	4.93±1.04	4.63-5.24

群」として、「南海トラフ地震被害想定地域在住5年未満」と「南海トラフ地震被害想定地域在住5年以上」の居住年数で組み分けたデータを用いてクロス集計表を作成（表3）した。そして、クラメールの連関係数を算出し、防災意識と居住年数の長さの相関を見た。

クロス集計表を基にクラメールの連関係数を算出した結果、Cramer's V=0.291 ( $p=0.002$ ) であり、防災意識と居住年数の長さには関連がみられた。これは、居住年数が長ければ防災意識が高くなるという結果を示している。

### 3. 1年生と3年生の防災意識の差

1年生と3年生の防災意識尺度の平均値を用いて、防災意識尺度総平均得点及び因子1から因子5までの6項目について、2群間のWelchのt検定を行った。（表4）

その結果、「防災尺度総平均得点」( $p=0.004$ )と因子3の「他者指向性」( $p=0.002$ )の2項目で有意差がみられた。

表3 南海トラフ地震被害想定地域在住年数別防災意識高低群のクロス集計表及びクラメールの連関係数検定結果

N = 103					
	南海トラフ地震被害想定地域在住5年未満 (%)		南海トラフ地震被害想定地域在住5年以上 (%)		計 (%)
防災意識低群	42	(40.8)	6	(5.8)	48 (46.6)
防災意識高群	34	(33.0)	21	(20.4)	55 (53.4)
計 (%)	76	(73.8)	27	(26.2)	103 (100)
クラメールの連関係数	Cramer's V : 0.291		p-value=0.002		

表4 防災意識尺度因子別平均値からのWelchのt検定

	1年生		3年生		95%信頼区間	
	平均値±SD	平均値±SD	t(101)	p	最小値	最大値
防災意識尺度総平均得点	4.23±0.49	3.95±0.46	2.92	0.004	0.09	0.46
因子1:被災状況に対する想像力	3.71±0.77	3.52±0.90	1.13	0.262	-0.14	0.52
因子2:災害に対する危機感	4.87±0.75	4.79±0.64	0.58	0.563	-0.19	0.35
因子3:他者指向性	4.38±0.79	3.87±0.80	3.26	0.002	0.20	0.82
因子4:不安	4.09±0.76	3.76±0.92	1.98	0.05	-0.001	0.67
因子5:災害に対する関心	4.08±0.77	3.82±0.64	1.86	0.07	-0.02	0.53

・SD:標準偏差  
 ・P<0.05を有意水準とした

#### 4. 南海トラフ地震被害想定地域居住年数別による1年生と3年生の防災意識の差

1年生と3年生を南海トラフ地震被害想定地域の居住年数別に1年生5年未満、1年生5年以上、3年生5年未満、3年生5年以上の4群に分け、防災意識尺度総平均得点及び因子1から因子5までの6つの項目について、Kruskal-wallis検定を行った。その後、Steel-Dwass法を用いて事後検定を行った。(表5)

結果、「防災意識尺度総平均得点」では、1年生5年未満と1年生5年以上、1年生5年以上、3年生5年未満に有意差がみられた( $p=0.017$ )。

因子1「被災状況に対する想像力」では、1年生5年未満と1年生5年以上、1年生5年以上、3年生5年未満に有意差がみられた( $p=0.020$ )。

因子2「災害に対する危機感」では、有意差は見られなかった( $p=0.098$ )。

因子3「他者指向性」では、1年生5年未満と3年生5年未満で有意差がみられた( $p=0.017$ )。

因子4「不安」では、1年生5年以上と3年生5年未満で有意差がみられた( $p=0.013$ )。

因子5「災害に対する関心」では、1年生5年未満と1年生5年以上、1年生5年以上と3年生5年未満、1年生5年以上と3年生5年以上に有意差がみられた。また、すべての因子において、1年生5年以上の中央値が最も高かった( $p=0.008$ )。

#### 【考 察】

##### 1. 居住年数での分析

平成21年度に鹿児島県砂防課<sup>10)</sup>が行った

表5 防災意識尺度と学年別南海トラフ地震被害想定地域居住年数によるKruskal-wallis検定

学年別 居住年数	N = 103								事後 検定	
	a. 1年生		b: 1年生		c: 3年生		d: 3年生			χ <sup>2</sup> (3)
	5年未満 (N=39)	5年以上 (N=18)	5年未満 (N=37)	5年以上 (N=9)	5年未満 (N=37)	5年以上 (N=9)	5年未満 (N=37)	5年以上 (N=9)		
中央値	四分位範囲	中央値	四分位範囲	中央値	四分位範囲	中央値	四分位範囲			
防災意識尺度	4.10	[3.80,4.55]	4.50	[4.28,4.75]	3.85	[3.60,4.25]	3.95	[3.65,4.45]	17.36***	a<b*
総平均得点										b>c***
因子1:被災状況に 対する想像力	3.50	[2.88,4.12]	4.12	[3.81,4.44]	3.75	[3.25,4.00]	3.25	[3.00,4.00]	9.82*	a<b*
因子2:災害に対す る危機感	5.00	[4.25,5.25]	5.25	[4.75,5.50]	4.75	[4.25,5.25]	4.75	[4.25,5.50]	6.30	n.s
因子3:他者指向性	4.25	[4.00,5.00]	4.25	[3.75,4.94]	4.00	[3.25,4.25]	4.00	[3.75,4.50]	10.22*	a>c*
因子4:不安	4.00	[3.50,4.38]	4.25	[4.00,4.50]	3.50	[3.25,4.00]	3.50	[3.00,4.00]	10.85*	b>c
因子5:災害に対す る関心	4.00	[3.50,4.25]	4.50	[4.25,4.94]	4.00	[3.50,4.25]	3.75	[3.50,4.00]	11.87**	a<b**
										b>c*
										b>d*

Kruskal-Wallis 検定

n.s= not significant, \*\*\*= $p<0.001$ , \*\*= $p<0.01$ , \* =  $p<0.05$ . Steel-Dwass 法を使用

「土砂災害防止の推進に関する住民アンケート調査」によると、居住年数が長くなると土砂災害警戒区域の認知度が高くなる傾向があったという結果が示されている。このことから、居住年数が長くなるにつれて土地勘を掴み、地域特性への理解が深まると言える。加えて、清水<sup>11)</sup>は『「地域および地域活動への関心」が高まると防災行動に広く促進的影響を及ぼす』とし、地域および地域活動への関心が低い場合の背景として、地域とのつながりが希薄なことを挙げている。また、今回居住年数と防災意識に相関関係が見られたことも踏まえ、居住の長期化に伴い、その地域特性に応じた防災意識の獲得や向上が促された可能性があると考えられる。

## 2. 学年別での分析

### (1) 教育の有無による影響

河田ら<sup>12)</sup>が大学生を対象に行った研究によると、下宿学生は地域情報に親しみが薄いこと、また、大学生は小・中・高校と違い防災教育がなく、災害情報を受け取る環境にないことが防災意識の低下に影響を及ぼしていた可能性があることを示唆している。

また、酒井ら<sup>13)</sup>は「学生の防災意識を高めるためには、災害や防災について授業で学ぶことが最も有効であることが確認できた」と述べている。さらに中村ら<sup>14)</sup>は、履修した知識を活用した教育を断続的に行い、危機管理の一貫として、防災、避難訓練の重要性の知識を行動へ移せるよう継続教育の必要性を示唆している。

しかし、学校教育でどの程度、防災意識をもつかは地域等によって差がある可能性がある。今回対象とした1年生は防災意識が3年生よりも高いという結果を得られたが、受けてきた教育や大学入学までに置かれてきた環境等により防災意識にはばらつきが出てくる可能性があると考えられる。これを踏まえ、

大学入学後に教育や啓発活動を通して再度、看護学生の防災意識を高め直す機会を設ける必要があると考える。そこで、授業形態は、講義で学んだ知識を実際の行動に移せるように演習形式での実践的な授業形態や現在居住している地域のハザードマップを活用する等、地域特性を踏まえた内容が重要と考える。

また、曾根ら<sup>15)</sup>の行った調査によると、学生災害ボランティア活動をしている学生は、社会人として必要な人間力、社会性や協調性等の学びを得ていた。そこで、啓発活動として、看護学生の所属する部活動やサークル活動での自主的な防災訓練、地域内もしくは看護学生主体でのボランティア活動などが挙げられる。地域に出向き、そこで実施されている活動に参加することは、地域特性や近隣住民との関わりを持つことなどに繋がり、地域情報へのアクセスを向上させることに繋がると考える。

### (2) 学生が置かれている環境による影響

矢々部ら<sup>16)</sup>によると医療学生において、GHQ28の下位尺度に関する調査で1・2年生よりも3・4年生のほうがメンタルヘルスに不調をきたしており、要因として3年生では臨地実習の開始に加え、コロナ禍では実習継続の見通しが立たないことや、実習参加のための厳しい行動制限が課されるストレスがあるとしている。また、中西<sup>17)</sup>が実施した緊急事態宣言下におけるアンケート調査によると、緊急事態宣言が発せられた4月とそれ以前の2-3月の回答者の行動を比較したところ、「飲み会・パーティ」「カラオケ」「ショッピング」「国内旅行」等の社会的活動が大幅に減少していたという結果が示されている。

医療系学生は、病院で臨地実習があるため、コロナ禍においては学業だけでなく日常生活においても行動制限などの影響を受けていたと推察され、この様な制限から、3年生は特



に社会的活動に対し消極的になっている可能性があると考えられる。また、実習に関してより現実的に考えることが出来るようになる3年生は、1年生と比較して人と交流する場を避けるなど、他者指向性の低下を助長した可能性があると考えられる。

### 【結 論】

本研究の目的は、4年制大学看護学生の1年生と3年生の防災意識について横断的調査を行い、防災への認識の違いを明らかにすることであった。今回、4年制大学看護科1年生と3年生の間には防災意識尺度において複数の項目に有意差が見られ、1年生の防災意識が高かった。

また、居住年数5年以上群と5年未満群の間には防災意識に有意な差が見られた。加えて防災意識と居住年数の長さには関連がみられ、居住年数が長いほど防災意識が高かった。

本研究における今後の看護学生に対する防災に関する啓発活動の提案として、1年次から4年次までの各年度で災害や防災についての授業をカリキュラムに取り入れ、防災教育を継続して受けることができる環境を整備することが必要であり、学生が主体となって防災意識を高めることができる機会を設けることが重要である。

### 本研究の限界

本研究は、4年制大学の看護学生を対象としており、他の大学とは異なるカリキュラムがあるため、今回の結果がすべての看護学生に適用できるわけではない。

### 【謝 辞】

本研究にご協力いただきました協力者の皆様に心より感謝申し上げます。本研究結果の

一部を、第29回日本災害医学会総会学術集会で発表しました。本研究において、申告すべき利益相反はありません。

### 【文 献】

- 1) 内閣府 (2012年8月29日) : 南海トラフ巨大地震対策ワーキンググループ 南海トラフの巨大地震による津波高・浸水域等 (第二次報告) 及び被害想定 (第一次報告) について  
[https://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/taisaku\\_wg/pdf/shiryo.pdf](https://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/taisaku_wg/pdf/shiryo.pdf) (2024年3月8日)
- 2) 濱本里彩, 白石三恵, 安井まどか (2017) : 看護学生の防災意識・防災対策の実態とその関連要因についての文献レビュー, 大阪大学看護学雑誌, 23 (1), 1-8.
- 3) 西上あゆみ (2000) : 看護学生の災害看護学授業に関する意識調査, 看護総合, 31, 71-73.
- 4) 田崎智恵子, 久保恭子, 及川裕子他 (2013) : 乳幼児の看護に携わる看護職の防災に関する意識, 日本災害看護学誌, 14 (2), 35-48.
- 5) 浅井利奈, 野末明希, 内田倫子他 (2022) : 南海トラフ地震への備えが必要な地域にあるA大学看護学生の防災意識と防災行動の実態, 日本看護研究学会雑誌, 45 (3), 501.
- 6) 元吉忠寛 (2018) : 災害自己効力感と防災意識の関連, 日心第82回大会, 20, 1031
- 7) 島崎敢, 尾関美喜 (2017) : 防災意識尺度の作成 (2). 防災意識と防災行動の関係, 日本心理学会第81回大会発表論文集, 70.
- 8) 島崎敢, 尾関美喜 (2017) : 防災意識尺度の作成 (1). 日本心理学会第81回大会発表論文集, 69.
- 9) Bone Marrow Transplantation (2013) : Investigation of the freely available easy-to-

- use software 'EZ' for medical statistics, 48, 452-458
- 10) 鹿児島県土木部砂防課：土砂災害警戒区域における住民の防災意識について. 2009. <https://www.sff.or.jp/content/uploads/H22Gakkai09.pdf> (2024年3月8日)
  - 11) 清水裕 (2013)：首都圏大学生の防災意識・防災行動の変化と防災行動に影響する要因—東北地方太平洋沖地震発生前後3年間の検討—, 東洋大学21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 10, 3-10.
  - 12) 河田恵昭, 船木伸江 (2004)：大学生の防災意識についての調査研究, 日本災害情報学会, 2, 115-119.
  - 13) 酒井裕香, 木谷耕平 (2023)：これまでの防災教育が学生の防災意識に与える影響, 会津大学短期大学部産業情報学科経営情報コース 2022 年度卒業研究論文要旨集
  - 14) 中村有美子, 藤井可苗, 菅野夏子他 (2013)：看護学生の災害看護学履修別防災意識と防災行動の検討, ヒューマンケア研究学会誌, 5 (1), 55-60.
  - 15) 曾根志穂, 武山雅志, 金谷雅代他 (2017)：東日本大震災被災地における公立看護系大学の学生災害ボランティア活動の実態と課題—今後の学生災害ボランティア活動とその支援の考察—, 石川看護雑誌, 14, 127-134.
  - 16) 矢々部未奈, 菅谷智一, 佐藤みつ子他 (2021)：コロナ禍における看護大学生のメンタルヘルス・SNS 利用とコミュニケーション・スキル、自己開示傾向の関連, 看護教育研究学会誌, 13 (2), 37-49.
  - 17) 中西晶 (2020)：新型コロナウイルス感染拡大時における大学生の行動変容—緊急事態宣言下におけるアンケート調査から—, 統計数理研究所, 第11回横幹連合コンファレンス, 10, 8-9.
  - 18) 厚生労働省 (2020年12月25日)：新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスに関する調査, <https://www.mhlw.go.jp/content/12205000/gaiyou.pdf> (2024年3月8日)
  - 19) 国立青少年教育振興 (2022年6月)：コロナ禍を経験した高校生の生活と意識に関する調査報告書—日本・米国・中国・韓国の比較— <https://www.niye.go.jp/files/items/7405/File/zentai.pdf> (2024年3月8日)